

The Reminiscence of Exellia 蒼天のヴァルマーレ

宮内庁突入

作成レギュレーション

基本概要

- ・ 経験点：260000 点
- ・ 資金：390000G
- ・ 名誉点：2100 点
- ・ 成長回数：361 回

制限事項

- ・ 放浪者／蛮族 PC 禁止
- ・ バニラ流派入門・秘伝使用禁止
- ・ 武器防具強化に関する特殊制限
- ・ シナリオ報酬成長回数が 10 以上のとき、その 6 割の偏重割り振りの禁止
- ・ 戦利品判定は振る

その他注意事項

- ・ レベル制限逸脱 PC の Lv シンク
- ・ ステータス制限逸脱 PC のステータス再振り分け
- ・ 成長回数制約逸脱時の強制デッドエンド

メモ群

光の加護の封印 解除順

原作（FF14）だと、氷→土→雷→風→水→炎。

一方 TReXLap2 だと、雷→水→土→氷→炎→風。

超戦艦ムサシ

原作：劇場版蒼き鋼のアルペジオ Cadenza。

故あって、ヤマトが『とある計画』に使用されることもあって、ヤマトの代理を務める超戦艦。超戦艦としての本体とは別に、魔動天使の技術を流用した『メンタルモデル』とも呼ばれる姿を持つ。FF 的なジョブは「占星術師」。運用目的が異なり、発生や人類との敵対関係なども当該作の彼女らとは別物。要するに、ガワと CV が同じだけの別人。

なお、動力源だけで言えば、アルペジオのムサシと同等レベルのものは持っている。

(※GMメモ：勘のいい人なら分かるだろうが、アルペジオのヤマトは白い。そのため、TRExLap2 世界では『魔導船ラグナロク』の代理を務める。

その他、アルペジオ関連の設定は軒並み変更されており、超戦艦ではあるものの、純ヴァルマーレ製(=人類の手で生み出された兵器)。

つまるところ、『見てくれが似ているだけ』の別人であることに注意されたい)

導入

君達は、『転落する女公の白磁亭』の前で、抵抗組織の手を借りていた。

抵抗組織の長、『長耳』ヒルダと交友を持ち、バックを得たエクセリアは、腕を組んで君達の後ろで黙っている。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「…とりあえず、蒼天騎士の強襲もあったことだ…、いよいよ以てゲスの匂いがする」

そう言って、妊娠初期の症状にも悩みつつも、君達を見る。

エクセリア

「行くぞ。すべてを終わらせるために…！」

コンテンツ解放：強硬突入 ヴァルマーレ宮内庁

強硬突入 ヴァルマーレ宮内庁

君達は、ヴァルマーレ宮内庁へと突入した。

(※GMメモ：構成で不足しているジョブ次第では、面子の補充を行う。

タンク：リリアーナ(ガンブレイカー)

ヒーラー：スチュアート(学者)

DPS：トーレス(機工士)、システィナ(巫覡))

エリア 1

蒼天騎士団の側についた神道衛士団の面子が襲いかかってくる…！

敵：神道衛士団の衛士×5

討伐後、すぐに増援。（神道衛士団の衛士×6）

更に討伐後、すぐに増援。（神道衛士団の衛士×6）

君達は、神道衛士団を倒していった。

その奥で、待ち構える影が 4 つ。

美剣のフレデリック

「教皇庁に楯突くとは、いけませんね…。

蒼天騎士フレデリックが、お相手いたしましょう」

敵：美剣のフレデリック、神道衛士団の衛士×3

美剣のフレデリック以外が撃退された場合、フレデリックの HP を全回復してフェーズ 2 へ。

また、フレデリック以外が倒されていないならば、フレデリックの HP は 50%以下にならない。

倒しきると、美剣のフレデリックは光に包まれながら撤退していった。

エリア 2

君達は先を急ぐ。

(※GM メモ：RP 待機)

敵：教皇庁の修道士×5

討伐後、増援（教皇庁の銅像×2、教皇庁の修道剣士×2）

君達は更に、敵を倒した。

狂羅のアルト

「来たか…。決闘裁判での借り、ここで返すぞッ！貴様らまとめて、跡形もない肉片に変えてやる！」

敵：狂羅のアルト

狂羅のアルトの HP が 50%以下になった場合、一度だけ HP を全回復して強化される。
また、履行されるまで、狂羅のアルトの HP は 50%未満にならない。

君達はアルトを圧倒した。しかし、撤退を許してしまう。時間をいいように稼がれているようだ…。

エリア 3

君達は先を急ぐ。

聖騎士テツオ

「ドブネズミめ！素晴らしい力を、見せてアゲる！」

敵：聖騎士テツオ

君達は、聖騎士テツオを打倒した。

エリア 4（宮内庁ランディング）

教皇庁の最上層で、飛空艇に乗り込もうとする天皇に追いついた。

ミシガン

「陛下…！」

後ろから追い縋ってきたミシガンが、ヴォルフラムを伴い話す。

ヴォルフラム

「予想通り、ミシガンは地下監房に囚われていた。見ての通り、救出は成功したぞ」

（※GMメモ：RP待機）

ミシガン

「なぜだ、天皇陛下ッ！」

宿敵であったフェルニゲシュが討たれた今こそ、嘘で塗り固められた歴史を正し、竜との対話を試み、ヴァルマーレは新たな未来へと進むべきときなのだ！

なぜ、理解しようとしない！」

有仁

「ミシガン…。愚かな従兄弟よ。数千年…そう、数千年もの間、受け入れてきた歴史と信仰を、民は易々と忘れられると思うのか？」

その言葉の後、君達とトーレスが走り始める。

背後で、光の槍を構える昌三がいた。彼はそれを、君めがけて投げる。

(※GMメモ：RP待機)

トーレス

「危ない…！」

彼は、大盾を構える。

光の槍を受け止め、防ごうとするトーレス。

それに割って入るように、エクセリアはその槍を掴んで破壊した。

エクセリア

「…そうすると思っていたよ。本当に、蒼天騎士が聞いて呆れる」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリアが赤雷の槍を昌三に投げると、昌三の姿はかき消えた。

有仁

「行け…『魔大陸』へ…」

彼の指示に従い、蒼天騎士団は天皇とともに飛空艇でこの場を後にする。

ミシガン

「マティアス卿！」

トーレス

「俺は無事だ！…それよりも、あんな馬鹿げたことをしたんだ、エクセリアを…！」

片膝をつき、髪飾りの代わりに生えていた角が消失しているエクセリア。

エクセリア

「…私はいい。この程度の呪詛、どうということはない…」

素手で戦神の槍を砕いたことに加え、唐突に赤雷を放ったこともあってか、右腕が焼け爛れていた。しかし、その手は震えていて、強がっていることが目に見えていた。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「なんて因果だ…。100万人を殺すはずだった男が…イイ騎士の座に就かされるとは…」

何の成果もない帰還

君達は、シンファクシ伯爵邸に向かった。

その道中、エクセリアは君達のうちのひとりに担がれていた。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「悪いな…。途方もない驚怖が、私を揺さぶってしまって…。歩けないんだ、自力で…」

そう言って、エクセリアはシンファクシ伯爵邸に転がり込む。

傷口は塞いでいたが、それでも痛々しい焦げ目が右腕についている。

エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「…何も、言わないでくれ」

トーレス

「俺は咄嗟に、担いでいた盾で光の戦士を護った…。それだけだ…。

だが、恐怖というのだろうか、これは…。エクセリアが駆けつけてくれなかったなら、俺は…」

(※GMメモ：RP待機)

トーレス

「頼む。恐怖のあまり動けない俺達に代わり、俺達の心を連れて、奴らを追ってくれ…。
どうか、俺達が愛するヴァルマーレを頼む…」

(※GMメモ：RP待機)

君達は、一度シンファクシ伯爵邸を後にした。
その後、追うように…エクセリアが出てくる。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリアは、少し疎むような、そんな暗い表情をして、君達を見ている。
やはり、身体が震えていて、リリアーナに支えられながら出てきている状態だ。

エクセリア

「怖かった。折角真っ当な路を征かんとした彼が死ぬのが。だから、私のすべてを賭けて
でも、彼を護るために槍を破壊せざるを得なかった。

ただこれで、この世界は『偽典』と呼ばれる路へと傾いた…。ならばどうするか、分かるよね…………？」

(※GMメモ：RP待機)

PC への選択肢

- ・この一件を無駄にするものか
- ・成し遂げよう、この国の改革を

エクセリアは支えられながら、君達を真っ正面に見据える。

エクセリア

「…ああ。そうだな…」

神道衛士団本部へ

君達は、その足で神道衛士団本部へ向かった。

ミシガン

「…世話をかけたな、ご兩人」

リリアーナ

「何をおっしゃいます。怪我の具合は、いかがですか？」

(※GMメモ：RP待機)

リリアーナの問いに、その筋肉を見せつけて言う。

ミシガン

「俺はこの通り、ピンピンしているとも」

それと同時に、過去視が発動する。

ミシガンの直談判

宮内庁のとあるところで、ミシガンが有仁と話している場面が映る。

ミシガン

「白壁王の裏切りこそが、すべての発端であり、ヴァルマーレ神道はその真実を隠し、偽りの建国神話を作った…それを数千年もの間、民にひた隠しにしてきた！いや、その民ですらも、すべては十二騎士の血に連なる者だったのだ…。そうなのだな、天皇陛下！」

それを聞き、有仁は目を開く。

有仁

「如何にして知り得たのかは、敢えて問うまい。…ただ、それは正しいと答えておこう。

ヴァルマーレ建国の祖である白壁王は、配下の十二騎士を率いてフェルニゲシュの妻、ペルーダを騙し討ち、双眸を奪って喰らい、人知を越えた力を得た。

それは紛うことなき、友たる竜への裏切りだ…。フェルニゲシュが怒り狂ったのも、無理からぬこと。その後の顛末は、お主も知るとおり…」

ミシガン

「1週間もの激戦の末、王の兄弟は死に、十二騎士の半数ほどもまた、討死した」

有仁

「…だが、フェルニゲシュもまた倒れ、ふたつの『眼』が、生き残りの騎士たちの手に渡ったのだ。誤算だったのは、両眼を失って尚、邪竜が生きていた事よな。奴はフレースヴェルグの眼を借り受け、蘇ったのだ」

それに対し、ミシガンが言う。

一方、白壁王の息子、十二騎士のひとりのハルドラスは、邪竜の眼から力を引き出し、戦う術を編み出し対抗した、と。

それに同意し、有仁はただ事実を述べていく。

有仁

「さて、我が従兄弟よ。ここで問おう。果たして先祖が犯した罪は、誰が償うのか？」

ミシガン

「…何が言いたい？」

有仁

「人の命は短い…。一代でその罪を購えぬと言うのなら、いつの世代まで、償いを続けなければならないのだ？」

それを聞き、ミシガンの言葉が詰まる。

有仁

「蜜月関係にあった竜を裏切った、王と十二騎士の行いは、まさしく罪よな。だからといって、罪人の子孫であると言う理由を以て、このヴァルマーレの民が、永遠に苦しまねばならないのか？」

儂にはできんよ。父祖の罪のため、我が子が、ヴァルマーレの民が、殺されてゆくのを黙って見過ごすことなどな…。竜は、悠久の時を生きる存在…。裏切りの記憶を抱えた奴らに、謝罪など通用せん。なればこそ、子らを護るためには、命がけで戦わねばならん。

そして、命を賭すために、人は理由を必要とし、戦いに身を投じるためには、正義を求めるものなのだ。…喩えそれが、作られた紛い物だとしてもな」

食ってかかるように、ミシガンが吼える。

ミシガン

「そんなくだらん理由で、戦争を続けるのはバカだろうが、有仁ッ！未来永劫、その罪を重ね続けるのは、歴史が違おうと証明しているだろうに！お前の言い様は、支配する側の詭弁だ。子を護るといいながら、その子らにこそ、血を流せと命じているに過ぎない！」

有仁

「そうだ。その通りだ。効率的に戦うため、貴族と平民を分けることもした。数千年後の謝罪が何になろう？お前の言うことは、ただのまやかしだ。

敢えて問おう。戦で家族を失った民に、そなたらの家族は、偽りの正義のために死んだのだと伝えるのだな？」

ミシガンは遂にキレた。

ミシガン

「伝えなければならないことを伝えないほうがいい、とでもいうつもりか、有仁！」

有仁

「歴代の天皇が、偽りと知りながら、数千年の戦いを続けてきたのはなぜか…。どうやらお主には、まだ見抜けてはおらぬようだな。

失望したぞ、我が従兄弟よ。だが、数千年の禍根を断つという点においては、儼もまた決意を固めておる。真の変革のためにな」

号令とともに、蒼天騎士のアルトと昌三がミシガンを取り囲む。

有仁

「そやつは、地下牢に繋いでおけ。他に『真実』を知り得た者がいないか、よくよく調べることも、忘れぬようにな」

昌三

「御意…」

過去を視た意志

君達は、過去視を終える。

リリアーナ

「その様子だと、過去を視たようだけど…大丈夫ですか？」

(※GMメモ：RP待機)

ミシガン

「これが『超える力』…。かつての龍姫公が警戒した能力…。星の光が、お前に宿した力か…。今、お前達が語ったことがすべてだ。俺は、従兄弟の…いや、有仁の言葉に、これ以上、切り結ぶ刃を持たなかった」

リリアーナ

「言葉とは、時に空虚なもの。人の意志こそが、真理を貫くのだと、私は我が主君と友に教えられました。そうであると仮定して、多少は考えてみたのですが、パズルをしようにも、異常なピースが気になります。歴代の天皇が『千年戦争』を続けた理由と、『真の変革』…」

リリアーナの思考が停止する。重要なピースはある、あるのだが…まるでそれを理解するのに必要なピースがないように感じるのだ。

エクセリア

「…恐らく、蒼天騎士が異常な力を発揮したことに、何らかの手がかりがあると思える。

あわやトーレスが死にかけた、あの一撃を放った昌三の力は異様だった」

ミシガン

「…建国の神話に謳われる、天皇の御前に並ぶ十二人の騎士…ナイツ・オブ・ラウンド。

奴らは、聖なる力を帯びていたという…」

リリアーナ

「歴史は人によって綴られ、宗教は神話を作り出す。やがて、人の想いで作られた『嘘』は、人々が望む物語に変わり、『偽りの真実』になる…。

…え、マズくないですかそれ？」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「蛮神、ナイツ・オブ・ラウンド…！」

アルトリア・キャスター

「…そうか、そういうことでしたか…！事態は刻一刻を争います。気を付けて」

そう言って、君達にヴァルマーレから明確な『依頼』が舞い込む。

依頼：ナイツ・オブ・ラウンド討滅

依頼主：G1 ミシガン

報酬：45000G+手付金 15000G

依頼内容：蛮神「ナイツ・オブ・ラウンド」の撃退

依頼文：

まさか、敬愛していた天皇陛下が、まさか蛮神だとは思ってもいなかったぞ。

何、特に異様なことは言わんよ。ただ単純に、依頼として奴の撃退を依頼したい。

蛮神を討伐するのは、君達の戦いに於いては普通だろう？

騎神の手がかりを求めて

君達は、一度隠れ家に戻るだろう。

そこに、クリストフもいる。リリアーナが露骨に嫌そうな表情をしているが、仕事だと思って割りきっているようだ。

クリストフ

「現天皇と蒼天騎士たちを乗せた飛空艇は、東の空へと消えた。

そこで私は直ちに、帝都上空を監視する監視所…『薙環陣地』に確認してみました。

すると、当地を管轄する桜卿から、天皇座乗艇『ソラール号』の目撃情報が寄せられました。これが意味することは分かりますね？」

スチュアート

「…では、天皇たちは『赫界雲海』にいると？」

(※GMメモ：RP待機)

クリストフ

「ええ、そのように考えても差し支えはないかと。

桜卿からの報告によると、『ソラール号』は雲海北部に広がる『高空層』に向かったようです。彼の地はバヌバヌ族の勢力が強く、桜卿ら城薙家の騎兵団は駐屯していない。

危地に赴ける手段を探す必要があるのです」

(※GMメモ：RP待機)

クリストフ

「いえ、ここは私の知己を頼ります」

そう言って、自分の実力しか信じなさそうな天才科学者は、通話の耳飾りを使用してある人物に話しかける。

通話相手

「もしもし、クリストフ？もしかして、ヤマトに用があるのかしら？」

(※GMメモ：RP待機)

クリストフ

「いえ、ムサシ。あなたに用があります。同じ超戦艦ですから、あなたの力を頼った方が早いと考えたので。それにバヌバヌ族の勢力が強い場所に突っ込まなければならない…。

そういうことなので、淵夏から大急ぎで飛ばしてもらえますかね？合流場所は白樺澄基地でよろしくをお願いしますね」

それを聞いた通話先の相手——ムサシは、ため息をついたような形で要望に応じる。

ムサシ

「丁度良かったわね、本当に。私がいなかったら詰んでたでしょ、全く…」

(※GMメモ：RP待機)

見識判定 目標値：33

成功時、「メモ群>超戦艦ムサシ」を開示

(※GMメモ：RP待機)

暫くして、超戦艦ムサシが空中を航行して着岸する。

ムサシ

「ハァ————～～～～…。途中で嵐に遭ったから大変だった…」

と言って、ムサシはメインデッキで項垂れる。

(※GMメモ：RP待機)

ムサシ

「お前らが、噂の冒険者？話は聞ってるよ、ヤマトからね。

なんか、風の噂では天皇陛下が蛮神を降ろしたってえ？」

クリストフ

「ええ、厄介なことに。兄が死にかけたのですから、その規模は計り知れませんよ」

(※GMメモ：RP待機)

話を大方聞いたムサシは、少し悩んだ様子であぐらをかいていた。

彼女としても、人間並みの知能しか持ち合わせていないのだ、悩むかどうかと言われれば悩むだろう。

スチュアート

「祝福無き者が天皇に接触していたことは、冒険者が掴んでいたんだがね…。何より気になるのは、『魔大陸』という言葉さ」

ムサシ

「魔大陸っ〜？…うーん、言葉だけなら聞いたことがあるレベルだ、何とも言えないや。

でもアレだろ？祝福無き者は、世界を滅ぼさんと暗躍しているって言うじゃない？それと同じ理屈で、天皇に吹き込んだんじゃない？

とすれば…途轍もない危険な力を秘めた場所、ってことになる」

(※GMメモ：RP待機)

ムサシ

「天皇を放っておけない。ヤマトのためにもね。トウゴ・ランディングに来てもらえる？
高空層にひとつ飛びするよ」

赫界雲海・高空層

赫界雲海の北部は、未だ多くの地域が未開のままである。『魔大陸』へと向かった天皇を追う冒険者ら一行は、この地に足を踏み入れるのだった。

新たな、戦いの火種が迫っているとも知らずに。

(※GMメモ：RP待機)

スチュアート

「ここが、『赫界雲海』の高空層…。『雑環陣地』よりも高い位置にあるのだな…」

ムサシ

「気を付けなよ、落っこちるかもしれないって言う恐怖だけではなく、ここはバヌバヌ族のテリトリーなんだからさ。彼らが無闇に刺激しないように、注意しないとね」

探索判定 目標値：33

成功時、奥深くまで行った段階で、なにかと遭遇する。

天皇を探して

スチュアート

「ふむ、蒼天騎士の姿もなければ、天皇が乗る飛空艇『ソラール号』も見えないな…」

そう言っていると、遠方から助けを求める声が響く。

びっくりしすぎてムサシが小ジャンプしたレベルだ。

ムサシ

「おいおい、待てよ…。こんなときにディスエリィアだってえ？」

赤軍百人隊長

「ムッ、ヴァルマーレの兵か！？総員、あの連中を捕らえるのだ！尋問して、強硬の行方を吐かせるぞ！」

(※GMメモ：RP待機)

ムサシ

「チッ、やるしかないか…！冒険者、手を貸せ！応戦して、バヌバヌ族を助けるぞ！」

この戦闘ではムサシも戦闘に加わります。

敵：コミンテルン・ソルジャー×（人数+15）

助けられたバヌバヌ族は、君達に声をかけてくる。

ロヌバナ

「これは、これは、本当に助かっただよ！吹き抜ける西風のように、感謝するだよ！

オイラの名前は『ロヌバナ』ね。善良なる旅のおヒトさま、お礼をさせてもらいたんだよ。ぜひ、ぜひ、感謝の気持ちを受け取るね！」

ムサシ

「！？？！？！？！？！？」

ムサシがドン引きしている。

(※GMメモ：RP待機)

見紛うはずもない、完全にドン引きしている。

そのままロヌバナの調子に流されるがままに、君達はズンドの村に辿り着いた。

ロヌバナ

「よくぞ、よくぞ、おいでになったよ！ここが大いなるバナバナの、おおらかなズンドの村ね！」

(※GMメモ：RP待機)

探索判定 目標値：33

まず挑んだだけで、ズンドの民は温厚な性格であることが分かる。

また、成功時、ロヌバナを救ってくれたことを感謝するバナバナ族が多いこと、それを見たムサシがドン引きしていることが分かる。

(※GMメモ：RP待機)

君達の問いに、ロヌバナが答える。

曰く、『冷酷なるズンド』と同じにされては困る、と。

そのとき、何かが雲を突き破るような、爆発音が聞こえた。

通話の耳飾りも、君達に向けて反応する。

(※GMメモ：RP待機)

リリアーナ

「聞いて下さい！雲海の中で、デイスエリィアの巨大飛空戦艦が、蛮神と交戦しています！例の雲海を泳ぐ、獣型の蛮神です！」

…一難去ってまた一難。未だこの禍根からは抜けられそうにない…。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「何…？雲神『フヴィートヴァル』とコミンテルンが！？」

ロヌバナ

「それは、それは、雲神さまね！？」

上空を、逃げるようにフヴィートヴァルが通る。

その体表には、傷痕が大量についていた。

その傷を癒やすためか、浮島のひとつを喰らう。

エクセリア

「…浮島のクリスタルを喰ったのか…？」

ロヌバナ

「ぬおおおおん！

まだ、まだ、浮島が食べられたね！これは、これは、一大事よ！」

その叫びに、フリーズしていたムサシでさえも、ロヌバナに向き直る。

(※GMメモ：RP待機)

ロヌバナ

「旅のおヒトさま、ズンドの長老様に会ってほしいね！このまま雲神さまを放っておいたら、バナバナが住む島は、全部雲海の底に落ちちゃうだよ！」

そうして、ロヌバナは君達をズンドの村に案内する。

この事態に慣れていないのか、ロヌバナは混乱した様子で、君達に話しかけてくる。

ロヌバナ

「一大事、一大事、これは一大事ね！さあ、さあ、はやく、長老さまに紹介するね！」

(※GMメモ：RP待機)

そうして案内されたところで、彼らの長老は君達を視る。

ソヌバナ

「これは、これは、歓迎せねばなるまいな！ロヌバナを救ってくれたこと、島を潤す雨のように感謝致しましょう」

(※GMメモ：RP待機)

ソヌバナとの問答で、ロヌバナが口を挟む。

曰く、白き鎧の者達は、「魔大陸の鍵」を探しにやってきたと。

しかし、ソヌバナは語ることを忌避した。そこは禁忌の地、語ることさえ禁じられた悍ましい場所なのだと。しかし安堵せよ、かの社がある島は、冷酷なるズンドが食わせてしまったと。

ムサシ

「ちょっ、それ最初に言いなさいよ！？…待てよ？今「魔大陸の鍵」は雲神の腹の中…。倒せば、これ以上島が食われる危険が減るよね…？」

聞き込み（冒険者+知力B）判定 目標値：ファンブルチェック

成功時、浮島を借り受けることに成功する。

また、この判定は成功するまで繰り返す。

ソヌバナ

「なんと、なんと、驚くべきことを！

ヒトの勇者は、そのようなことを成せるというのか。なれば、なれば、雲海の平和のため、我らズンドは、柔らかな春風の如く協力せねばなるまい。ズンドの浮島ひとつを、お貸ししよう」

そして、雲神『フヴィートヴァル』を撃退するという、大仕事を担うことになった。
…護魂の霊鱗？勿論、牽引役を務めるムサシに持たせてあるに決まっている。

雲神フヴィートヴァル討滅戦

君達は、雲神フヴィートヴァルを引き寄せるための餌…すなわち浮島を使い、フヴィートヴァルに挑む。

(※GMメモ：RP待機)

敵：フヴィートヴァル

君達は、フヴィートヴァルを討滅し、「魔大陸の鍵」が浮島の地面に落ちるのを見た。
その時、光のクリスタルが輝く…。

(※GMメモ：RP待機)

光の加護の封印がまたひとつ、氷の封印が解ける。

ハイデリン

「…戦士よ…光の…よ…。聞こ…ますか…我が…が…。闇…迫って…新たな…。
どうか…声が…届いて…ように…」

その声の後、幻覚から醒めた君達は、「魔大陸の鍵」を拾う。
そうして後ろを見たら、黒法衣の女と天皇・有仁がいた。

アルケイア

「雲神『フヴィートヴァル』を屠ったか。何回目かね、こうやって神を狩るのは？もはや君の力は、『人』とは思えないほどだ…」

(※GMメモ：RP待機)

有仁

「天使い殿…。かの者が手にしている品が、例の？」

アルケイア

「そのようだな…。『魔大陸』への扉を開くアル・メナスの秘宝…」

そう言って、彼女は一行を縛る。

(※GMメモ：RP待機)

アルケイア

「多少は、光の加護が戻ってきているようだが…、蛮神を倒せたとして、光の加護を失っている今、まるで赤子のようだな、光の使徒よ」

(※GMメモ：RP待機)

その闇の使徒——アルケイアは、魔大陸の鍵を天皇に渡す。拘束を解き、闇に蝕まれた君達を尻目に、天皇は言う。

有仁

「ご協力に感謝しますぞ、天使い殿。そして、英雄殿にも礼をせねばなるまい。フヴィートヴァルを倒す手間が省けたのだからな。

…準備は整った…。今こそ、天への階段を拓くときよ！」

そう言って、天皇は魔大陸の鍵を翳す。鍵が解錠され、レーザー光が放たれる。

高笑いする有仁を、君達は見てることしかできなかった。

有仁

「いよいよだ…千年の歪を正し、真なる変革を…人の手に歴史を取り戻す時が来たのだ」

天皇座乗艇「ソラール号」が去って行く。

闇が晴れたとき、君達はただそれを黙って見ていることしかできなかった。

…同刻、封印が解かれた魔大陸が、ヴァルマーレ東方の沖合に出現していた。

リリアーナ

「お疲れ様。とにかく、あなた達が無事でよかったです。超戦艦ムサシの出力には驚かされたよ…。ただ、牽引装置が悲鳴を上げていたのは覚えてるね…。

それにしても、ここに来て新手の祝福無き者とは…。天皇たちに『魔大陸の鍵』を奪われたことは、想定外だったとしか言いようがない…。しかし、私達はまだ生きているし、祝福無き者や天皇に対して、立ち向かう意志も折れてはいない。諦めずに追撃しよう！」

(※GMメモ：RP待機)

君達は、一度オク・ズンドの長老たちのもとへ向かう必要がある。
向かった先で、なにか異常が起きていることに気付く。

スチュアート

「静かすぎる…」

向かってみると、ディスエリィアの軍勢が、バヌバヌ族を囲んでいるではないか。

(※GMメモ：RP待機)

ニコライ・ルニッチ

「まだいたか…。おら、大人しく出てこい！」

彼にはすぐにバレて、君達が出てくることを誘導される。

(※GMメモ：RP待機)

ニコライ・ルニッチ

「ほう、蛮族どもではなかったか」

君達を見て、感慨深い様子で対応するニコライ。
そこへ、歩いてくる者がひとり。

ウスペンスキー2世

「なるほど、先遣隊を壊滅させたのは、ヴァルマーレの者と考えていたが…、貴様たちだったか」

その鎧に身を包んだ男…アレクサンドル・ウスペンスキー2世は、君達を見て語る。

ウスペンスキー2世

「『写本師』から伝え聞いたとおり、光の戦士とやらは、どこにでも顔を出すものだな」

ニコライ・ルニッチ

「では、彼らが…！？」

ウスペンスキー2世

「そうだ、我が共和国のケルディオオン統一を阻む、英雄殿というわけだ。

…貴様たちも『魔大陸』を追っているようだな。フン、当然か…。彼の地には、蛮神を御するための、アル・メナスの叡智が残されている。

貴様ら《暗魂の暁》とやらが嗅ぎ回っても不思議はない。蛮神は、星の命を喰らう化け物だ。故に何としても、そのすべてを殲滅せねばならん…。貴様たちも、それを分かっておろう？」

(※GMメモ：RP待機)

ウスペンスキー2世の問いに、君達は少なからず応じるだろう。

ウスペンスキー2世

「ククク…。この状況で、よくもぬけぬけと本音を言うものだ。まあ良い、ケルディオオン統一など、星の運命に比べれば、些末なことに過ぎぬ。蛮神を制することこそが、国家主席たる我が役目。なればこそ、神を降ろした蛮族を生かしてはおけん」

そう言って、配下の兵にバヌバヌ族…ズンドの民を殺させようとする。

スチュアート

「待て！その者達はテンパードでは…！」

彼らを襲おうとする者達を、ひとつの砲撃が弾き飛ばす。

ニコライ・ルニッチ

「何ッ…！！」

君達の背後には、巨砲を担いでいるケーシスの姿があった。

それを見て、咄嗟にウスペンスキー2世を下がらせるニコライ・ルニッチ将軍。

通信機を用い、空中の巨大飛空戦艦に土埃を起こさせる。

ウス Pensキー2 世

「また会おう、フレイディアの英雄よ。またいずれな…」

上空を悠々と飛ぶ新造飛空戦艦を、スチュアートは睨んでいた。

君達は、一度ムサシまで戻る必要がある。

報酬

基本要素

- ・ 経験点：27500 点
- ・ 資金：基本 10000G+ナイツ・オブ・ラウンド討滅手付金 15000G = 25000G
- ・ 名誉点：100 点
- ・ 成長回数：10 回

その他報酬

- ・ フヴィートヴァル・ウェポンチェスト×1